

国見の輝き人

「もっとおいしく」を目指して —

谷津 ようすけ 陽介さん (大木戸)

農業を始めようと思ったきっかけは、自宅で果物の直売所を営んでいるということもあり、幼い頃から農業が身近にありました。ぼんやりとしたものですが、将来は跡を継いで農業をやるだろうな、という考えがあったように思います。福島県果樹研究所で4年、短大も含めると6年間、農業を基礎から学んだことで、国見町で就農しようという強い決意を持つことができました。

果物を買いに来たお客様に、「おいしいね」と言葉をかけてもらった時にやりがいを感じています。毎年必ず買いに来てくれるリピーターの方も増えているので、もっとたくさんの方に食べてもらいたいと思っています。

私は、生産者の皆さんがひとつひとつ丁寧に一生懸命に育てた国見町の果物は、どこにも負けないぐ



収穫間近のラ・フランス

らいおいしいと思っています。そして、国見町の果物といえば、何と言っても「モモ」です。今後はモモの作付面積を増やし、今まで学んできたことを参考にして、収穫量を増やすような方法にチャレンジしたいです。

皆さんもぜひ、町産の果物を手に取り味わってみてください。そして、そのおいしさを町内外にアピールしてもらい、一緒に町を盛り上げていけたら嬉しいです。皆さんによりおいしい果物をお届けできるよう、これからも頑張っていきたいと思っています。



「谷津農園」では、陽介さんがモモをはじめリンゴやラ・フランス、サクランボなど様々な果物を育てています。「今年もラ・フランスが美味しくできました」と笑顔を見せました。

町長コラム



ま
真こらむ

【第3回】

心のキャッチボール

市町村対抗野球大会の2回戦。相手は優勝と準優勝を何度もしている浪江町。試合は1回裏に国見が3点先取。その後も攻め続け、浪江が追う展開。でも、相手がプロ経験のある投手を投入、国見は負けた。5対6。

試合中、引地は1回戦の「翔」と同じようにマウンドに立つ投手に念を送った。「玲温は抑えられる。大丈夫。さあ投げろ」と。「玲温」が「直也」に代わっても続けてた。

野球はしない。詳しくもない。けど投手がボールを投げないと試合が進まないことぐらいはわかる。この日、その役を担ったのが18歳の直也和20歳の玲温。チームで1番目と2番目に若い。細身で胸も薄い二人がマウンドに立つと、内野と外野の選手たちが声を掛ける。ベンチからも声が飛ぶ。きっと「心配すんな。思いっきり投げろ」、「守備は任せます」といった心のやり取りをしているんだろう。そう想像したら、何かその、グッと来た…。

「頼り、頼られる関係、心、大事だよな」と気づかせてくれた素晴らしい試合と私たちの素敵南国見チームに「ブラボー!」を贈る。

引地 真

